

令和4年度第1回学校評価に係る外部評価委員会議事録

日時 令和4年11月1日(火) 10:00～11:30

オンライン (Zoom) 併用開催

1. 開会 (富川副校長)
2. あいさつ (吉岡校長)
3. 委員紹介 (富川副校長)
橋本末子(平塚共済病院看護部長)
鈴木多加子(一般社団法人 神奈川県訪問看護ステーション協会副会長)
高橋勝(東京福祉大学・大学院教授)
井口健一郎(特別養護老人ホーム潤生園施設長)
江口智子(オフィスナースナレッジ代表)
※敬称略
4. 議長選任 (橋本委員を議長に選任)
5. 資料説明 (事務局: 吉岡校長・富川副校長・大山看護科長)
6. 意見交換等

議事概要

令和3年度の学校運営、教育活動全般について意見交換を行い、今後の教育の発展に向けて示唆を得た。

○各委員からの主な意見

各委員には、「学校評価報告書 2021年度(以下「報告書」という。)」及び委員会資料に基づき現状及び今後の課題について説明し、外部委員会における質疑等の概要は、下記のとおりである。

(意見交換開始)

(事務局: 吉岡校長) 例年は1年間の学校運営について項目ごとにご意見をいただいていた。本校は4年制となって6年目を迎え、今学校抱えている課題が何なのかということ、少し長いスパンで客観的に評価するべきと考えている。

まず、今の状況、工夫しながら取り組んでいることについて説明する。

入学前について、4年制となった学校の説明をしっかりとすることが大切と考えており、学校説明会、インターンシップを工夫し、高校生が来校する機会を設けて説明している。新型コロナウイルス感染症のこともあり、一昨年度からウェブでの開催等工夫して行ってきた。今年度はウィズコロナということもあり、感染対策を講じて、来校する形での説明会、インターンシップを実施している。本校に入学してくるのは高校生が大半であり、社会人はとても少ない。そのことから、高校の教員に4年制のありようを理解していただくことがとても重要となるので、4年制教育の周知について関わっているところである。

入学試験の区分は指定校推薦、AO、一般の3区分であり、それぞれ定員の30～40%を採用している。指定校とAOは早めに決まるので、学習習慣をつけるということで、入学前教育を実施している。内容は医療系総合と、今年度からは医療系学生のための国語力入門を実施している。また、看護は人との関わりを大切にしていくもので、自分、相手の心のありように関わっていくものであり、関係性をどう築くか、自分の強み、弱みは何なのかということを知り、関係構築をどのようにしていくかということで、科目として「人間関係論Ⅰ～Ⅳ」として各学年で連続して2～3日間、外部講師により学校から切り離された環境で他者との関係を築くということを講義の中で行っている。

メンタルトレーニングについて、当初は4年の国家試験に向けて導入したものであるが、これでは遅いと考え、学生の背景を考えると早い時期から打たれ強い、何かあっても乗り越えていけるような強さが必要と考え、2年次から実施している。

心の健康相談室について、カウンセラーに月2回来ていただいて、学生の相談を受けていただいている。教員も面接等は行っているが、教員には言えないということもあるので力をかしていただいている。

看護師という社会性を育んだ専門職業人を育てるとというのが養成校であり、卒業前の特別講義において、このことについて講義をし、卒業式を迎えている。

今年度、初めての試みとしてホームカミングデイを実施した。社会人1年目に、勤務先と連携し、学校として何かできないかという考えのもと取り組んだ。

単位未修得の問題で4年で卒業できない学生もいる。また、多様性のある学生への対応としている取り組みを行っているが、メンタル面、家庭背景、人間関係等が課題となり、臨地実習の多いことは強みでもあるが、学生の傾向も見えてくる。卒業した後も、新卒で退職する状況も見られる。入学時に定員割れはないが、4年間で卒業するのは8割。工夫はしているが、どうあれば4年間で、働き続けられる看護師を育てるかということについて意見交換したい。

(事務局：大山看護科長) 教育プロセスについて、改正カリキュラムのポイントは「地域・在宅看護論の強化」「臨床判断能力の強化」「ICTの活用」「コミュニケーション能力の強化」であるが、これらは本校が4年制カリキュラムを構築した時点で網羅されていた。厚生労働省のカリキュラムが示された時点で、今までの方向性は間違っていないという確信を持ち、自信につながった。

教員の手ごたえとしては、学生の能力を培い拡大すること、人を点ではなく線としてとらえ、臨地実習等、学外の教育環境の中で自ら伝える力、調整する力を培うということができたことを実感している。

4年間の中で「学生を支える」ということについて、多様性のある学生の支援として、学生を取り

巻く社会環境が複雑、不安定化していく中で、単位未修得者、中途退学者が一定数存在し、メンタル面での課題を抱えている学生も増えてきている。学習に集中できず、4年間継続できないことにつながっていて、失敗から学ぶということを大切なこととして関わってはいるが、失敗してそのまま立ち上がれないという状況も発生している。そこで、メンタルトレーニングについて、令和2年度から外部から専門の講師を招いて、2～4年次に実施している。スモールステップと「できる自分」の創造を繰り返し教えていただいている。併せて「人間関係論」として、自己理解、他者理解について学んでいる。

メンタルトレーニングと同時に「心の相談室」を設けている。カウンセラー1名、メール予約制で、プライバシーにも配慮している。今年度は希望者が多いことから月3回実施しているが、予約で埋まる状況となっている。

精神面だけでなく、行動レベルでの助言もしてもらっていて学生からは好評を得ている。

(事務局：富川副校長) 奨学金について、直近の令和4年度については、県修学資金、学生支援機構貸与、同給付合わせて概ね全学生の3割程度が制度を利用している。

入学前の取り組みについて、学校説明会、学校訪問により4年制教育について周知を行い、学生の確保に努めている。指定校推薦、AOの合格者に対して入学前教育を行っている。一般入試については、応募者数に年度ごとに変動があり、入学者は合格者の半数程度となっている。

4年制の看護師基礎教育を行う必要性についての周知と、高校進路担当者の理解を得るための働きかけが必要と考えている。指定校推薦による入学者からも退学者が出ている。早い段階で進路を決めなくてはならないことから、志望動機がはっきりしないまま受験している影響があると考えている。看護師になりたいという明確な意思をもった学生の確保が必要であり、高校生、保護者、高校進路担当者に対して、4年制教育の意義を周知していく必要がある。今後に向けて一般入試の受験者確保と、他校との違いをアピールするための広報や、試験日程についても検討する必要があると考えている。

(事務局：大山看護科長) 卒業後の取り組みについて、2回の卒業生を輩出したが、早期退職等もあることから、今年度「ホームカミングデイ」を開催し、70名に通知し52名が参加した。実施後のアンケート結果では、参加前は「あまり期待していない」という声もあったが、開催後は「非常に充実した時間が過ごせた」として、満足度は高かった。全体の会が終わったあとも、職場での悩みなどについて意見交換している状況もあり、基礎教育として何ができるかということを検討している。

(井口委員) 在学中のメンタルヘルスの問題について、感覚として、メンタルに不調をきたす学生は増えているのか。

(事務局：大山看護科長) 感覚的には少し多くなったと感じる。メンタル不調というよりは、学習についていけない、実習での対応困難などが増えているという印象である。

(事務局：吉岡校長) 報告を受けている中では、学生の育ってきた環境が影響していると考え。家

族との関わりやいわゆる発達障害のような背景を抱えているようなケースも見られる。それが影響して学校になじめず、学習に影響を及ぼすようなこともあると考えている。

(江口委員) 入学者選抜の考え方で、看護師になりたいという明確な意思を持った学生の確保とあるが、明確な意思を持った人が長続きするとも限らないという感覚もある。目標があることは出だしとしては良いと思うが、自分自身の学生時代の経験を振り返ると、大学に行けなかったあるいは経済的な問題から看護学校に行った人も長続きしているような気がするので、時代が違うかもしれないが少し引っかかった。

(高橋委員) どこの学校、大学も含めて、学生の確保は課題。社会が複雑化するということは、価値観は多様化するということ。社会が豊かになり、いろいろなことが見えることで、今の学生は試行錯誤しながら大人になり、遠回りしながら生きているように見える。自分は、教員養成に関わってきて、教員の魅力伝え続けてきた。知識や技能は二の次で、時間をかけて育てるということをやってきた。

カウンセリングについて、人生、生活面のカウンセリングと学習面のカウンセリングがあると思うが、後者は実施しているのか。

(事務局：大山看護科長) 「学習カウンセリング」として銘打っては実施していない。学習面では単語を覚えられない、文脈がわからない、短期記憶の積み重ねが難しい等の事例に対する相談は行っている。

(井口委員) コロナ禍の総合病院の環境が熾烈な中、ホームカミングデイ等を実施し、看護の原点に戻してもらえという取り組みは大きく評価したい。

(橋本議長) 現在病院では、コロナについては中等症まで受け入れている。スタッフの中にも疲弊するケースもあったが、昨年度離職率は非常に低かった。どこでも状況は変わらないだろうということ、様子見ということもあったのではないかと。今年度は例年通りの離職率に戻った。昨年度の反動があるかとも思ったがそれほどでもなかった。

新人のサポートについては、学習面は何とかなったが、組織のメンバーとして受け入れるためのサポートが困難であった。今年の新人は学生時代からコロナ禍なので、うまく対応できていたが、今の2年目にとっては先輩、同期との人間関係を築くのが難しく、コミュニケーションが苦手というケースが出ている。離職率が通常の2倍近くとなった病院も見られるが、平塚においてはそこまでの影響はなかった。

(鈴木委員) 指定校推薦での入学者の退学理由については、漠然と入学したための現実とのミスマッチ等が見られる。その対応は必要。自分たちのころは、とにかく必死で勉強して看護学校に入学するしかなかった。入学しても卒業できるのは8割程度、当時の仲間で看護師以外のことをやっている人もほぼいない。

多様性については、訪問看護師の離職率は病院より高い、とにかく辞めさせないという考えでやっ

ている。原点に戻って、一度でも看護師を志した学生に「看護の楽しさ」を伝えて行ってほしい。入学者全員が辞めないで卒業する、就職してもやめないで頑張るといことはなかなかないので、学校としての目標は少なめに見積もってもいいのではと思う。

カリキュラムにおいて、実技重視としているところ、OSCE に現場から大勢の看護師が参加している。もっと活用して、生の力を見せるのも看護を目指す原動力になると思う。ユニフィケーションの教員との共同授業においても、手ごたえを感じた。

現場の看護師を活用し、看護の良さ、楽しさを悲壮感なく伝えてもらえたらと思う。

(事務局：大山看護科長) 多様な学生の価値と言いながら、教員の価値観に抑え込んでいるのではないかということを感じている。なんとなく看護師になりたいというケースも大切にしたいと思っているが、看護師はこうあるべきという考えがあるという振り返りができた。試行錯誤をしながら自己形成をしていく学生たちに自分たちが戸惑ってしまい、とどまってしまっているように思えた。

(事務局：吉岡校長) 学生の楽しいという気持ちを継続させたいと思っているが、自分たちの価値観を示していたように感じた。学生が楽しいと思える機会を設け失敗から学ぶと言いつつ続けているが、高校までは答えが出る学習形態であるところ、看護という答えのない学習をした時に混乱し、考え続ける中で悩み、その違いに戸惑うことになる。コミュニケーション能力についても自分は長けていると自分を評価して入学してくる学生もいるが、看護で使うコミュニケーション能力は専門的であり、経験を積む中で身につけ、成長していけばよいと考えるが、どうしても自分中心のコミュニケーションとなってしまう、相手の良さを尊重できず、そのことで疎外感を感じているケースもある。失敗から学ぶということを継承しつつ、学生の思いを大切に、個人をターゲットに支援していくことが大切と感じている。また、学生の国語力の弱さを感じる。論理的に物事をとらえ、行動に移すということだが、行間がうまく読み込めず、違った回答をするということもあり。昨年度から入学前講座に国語を加えた。

学生の様子から、楽しいと思える機会、力を抜いてもいいかなと思える機会も大切と考えるが、より学生の状態を高める方法があればと思っている。何かお考えを聞かせていただければと思う。

(井口委員) 国語力の問題は介護の分野やソーシャルワーカーの分野でも言われている。自分の経験では、大人になってから学びなおすこともできるし、基礎的な部分の弱さを感じる、自分としては学校に何か協力ができればと思っている。

(高橋委員) 文科省は言葉の力や言語力を学校教育の基本に据えている。コミュニケーションと論理的思考だが、両方とも年齢や職業、経歴等なるべく違う人間と付き合うことによって自然と身につけていくものと考えているが、高校までは同類で仲間をつくりがちなので、第3者に明晰に分かるように語るという力が出てこない。ゼミや発表の場面では、親しい仲間ではなく自分と違うタイプと一緒にやるという練習が大切。もう一つ大事なことは、ホームカミングデイの参加状況からも、学生時代の成長は指導によってのみではなく、仲間と一緒に頑張る、支えあうということが出来るから頑張れると思う。強みを強化するのは他者、弱みをカバーするのが仲間という使いわけが大切と思っている。

(江口委員) 学生の状況は分かったが、教員のメンタルも心配。自分よりも学生のことを優先するようなことも見られるので、そこへのフォローもお願いしたい。

(事務局：大山看護科長) 看護科の中では雑談、旬な話をするのを大切に、皆が力を出せるように取り組んでいきたいと思っている。

看護科長として、看護科の一教員として看護の魅力をいかに伝えていくかということを考えさせられた。時代が求める看護師になれるようカリキュラムを工夫、実践し、看護の楽しさや喜びを伝えていこうと言っているが、教員が背負いすぎているのではないか。もっといい方法があるのではないか、それぞれの先生の立場で教育に関連したメッセージがいただければ。

(橋本議長) 以前は学校でもっと教育してほしいと考えていたが、病院の1、2年目に看護の楽しさ、患者さんとの触れ合いを経験した人が長く続いているように思う。学校側が教育として取り組み、病院に来たらその中で看護の楽しさを味わってほしいと考えている。新人教育がなかなかうまくいかないところもあったが、近年は語りを取り入れ、経験を自分たちの中に落とし込んでもらう。知識の習得だけではなく、大変だったけどやりがいがある、面白いという経験を経験することが継続につながると思う。師長や主任も、自分の看護体験を語ることで元気が出る。今回の会議で、自分がやっていたことの意味が分かり、学びになった。

(事務局：吉岡校長) 意見をお聞きして、仲間と共に成長する、大切に学生たちであってほしいと感じた。強みを育むには違うタイプの人との交流が大切ということはもっともだと思う。コロナ禍が3年目となり、学校の方針として、臨地実習施設との協議の結果、学生の行動範囲を狭めている現状がある。具体的には外食や外出に規制をかけている。ウィズコロナという国の方針の中、学生が社会とかかわっていくことが必須ということを再認識した。病院等とも話し合いを継続し学校教育を行い、社会生活も大切にして社会の中で、学校以外の部分で価値を見出し強さを育むということを改めて考えていきたい。教員も少し力を抜き、看護は楽しいということを学生に語り続け、関わっていききたいと思う。

(意見交換終了)

7. 閉会 (事務局：富川副校長)

以上